

■“Conradian Crosscurrents: Creativity and Critique,”  
New York City, 1-3 June 2017 (アメリカ・コンラッド協会)

設楽靖子

アメリカ・コンラッド協会の主催によるコンラッド学会は、2014年8月のバンクーバー大会から3年ぶりになる。定期的に北米で開催される大会としては、毎年1月にMLA年次大会での1～2部会があるが、それ以外に不定期で開催されているのが今回の集まりである。アメリカでの学会の特徴は、そのときの企画者の個性が全面に出ることにある。私はその企画力に魅かれて、前回に続いて参加してみることにした。今回は、ニューヨーク市のフォードム大学(セントラル・パークの近く、リンカーン・センターの隣という一等地)が会場、となればChris GoGwilt氏が中心で企画されたものと想像された。大文字Cが4つ並ぶお洒落な学会タイトルは、意図的に練られたものであろう。

3日間の日程で、プログラムは3つのKeynote Lectures(招待講演)と9つのSessions(研究発表)で構成され、全部で約40点の講演・発表があった。参加者・発表者は北米の研究者が多いのは当然であるが、イギリス・コンラッド協会の中心メンバーたちも参加しており、これら二つの学会の強い協力関係が窺えた。

まず、プログラムの要に位置づけられる招待講演は、イタリアの政治哲学者アドリアナ・カヴァレーロ(Adriana Cavarero)、文化研究の泰斗ジェイムズ・クリフォード(James Clifford)、ジャマイカ出身の作家・英文学者マーガレット・ツェザール=トンプソン(Margaret Cezair-Thompson)の3人であった。初日は、ヴェローナ大学(ニューヨーク大学客員)のカヴァレーロが、“Soundscapes of Darkness”と題された講演において、ハンナ・アーレントの全体主義やホロコーストをめぐる論を引用しつつ、“Heart of Darkness”のacoustic elementsについて論じた。2日目には、*Writing Culture* (1986)などで知られ、コンラッド研究では人類学者マリノフスキとの関係を追った論文を著したクリフォードが、“Conrad in Trump Country”なる講演を行ない、その中には“I feel Conrad’s darkness at home.”という1文があった。3日目のツェザール=トンプソン(Wellesley College)は、ジャマイカを舞台とした

小説 *The Pirate's Daughter* (2007)で米国の文学賞を得ている。“The Blank Spaces in Conrad's ‘Heart of Darkness’”という題にて、カリブ出身者が北米の大学院でこの中篇を読む醍醐味などを論じた。学会タイトルにある“crosscurrents (横断流)”という表現はコンラッド研究の流れを他領域と交差させつつ遠心的に展開させる意図を反映しているのだろうが、これら3人の招待発表者はそれを具体的に形にしたものと言えよう。ジェイムズ・クリフォードをコンラッド学会に呼ぶなど、相応の人脈があつて可能になることであろう。加えて、J. Hillis Miller からの録画メッセージもあった。

次に、9つの sessions を略記する。1日目の第1セッション“*Nostromo's Crosscurrents*” (L. Davies, D. Erdinast-Vulcan, J. Szczypien, M. Wallaeger)では、Mark Wallaeger が Vasquez 著 *The Secret History of Costaguana* を論じ、この南米発の小説が今後の *Nostromo* 論に与える影響を窺せた。第2セッション“Polish Scholarship on Conrad” (G. Branny, L. Omelan, J. Skolik)は、会場をポーランド共和国ニューヨーク総領事館に移動して行なわれた。この建物自体、Madison Avenue の中心に位置する歴史的保存指定建造物であり、北米におけるポーランド系移民の存在感を示すものであろう。ここを会場に、ポーランドとウクライナ出身の研究者が発表するという演出であった。夜には、ここでレセプションが催された。

2日目の会場はコシチューシコ財団で、これも、コンラッドと出身国との結びつきを顕在化させる意図であろう。当財団は、在外ポーランド人社会に向けて出身国の言語や文化を教育、継承、広報する活動を行なう機関のようで、内部の壁面には、おそらくナポレオンのロシア遠征を題材にした絵画 (“The Warrior's Soul”の挿絵になるような) が多数掲げられていた。この日の第1セッション“Media Crosscurrents” (M. Boudreu, C. GoGwilt & H. Meyer, W. Krajka, J. Napolin)では、Wiesław Krajka が“To-morrow”のポーランド語オペラ (1976)を紹介した。第2セッション“Narrative Crosscurrents” (R. Gillian, D. Kachel, A. Luyat, J. Peters)では、John Peters が“Heart of Darkness”における Marlow の沈黙 (oxymoronically silent) に注目して、語り手と聞き手の間のギャップを論じ、第3&4セッション“Intertextual Crosscurrents” (W. Atkinson, C. Delassalle, M. DiSanto, R. Hampson, E. Harrington, K. McAuley, B. Budelko, B. Richardson)と続いた。

3日目は、フォーダム大学に戻り、第1セッション“Communities” (M. Ross, A. White, Yao Xiaoling, An Ning)では、Andrea White が“*The Rover: An Unlikely Patriot*”において、この小説の執筆時期と新生ポーランドの誕生時期とが一致することに注目し、nationalism の要素や新生国の vulnerability を論じた（→*The Conradian* 42, no. 2, 2017 に掲載）。第2セッション“Crossing the Color Line” (Pei-Wen Kao, J. Miele, L. Pelucacci, M. Pawlowski)の中、Mary Pawlowski は“Commercializing the Congo”という発表にて、Marlow が黒人に手渡す“biscuits”に注目し、この商品をめぐる当時のアフリカ市場を考察した。最後、第3セッション“Reading across the Sciences” (H. Epstein, B. Kavanach, N. Lautoo, Y. Levin)では、Hugh Epstein が“Shocks and Vibrations: Conrad’s Physics”との発表にて、テキストと書簡の中の出現するこの2単語に注目し、その役割を示唆した。Brendan Kavanagh は、*The Nigger of the ‘Narcissus’*の中の表現“a cough metallic”から congection of social disease へと展開させた。

エクスカージョンとして、2日目の夕方、ニューヨークのランドマークでもある公共図書館(New York Public Library)に行き、The Berg Collection of English and American Literature を見学した。このコレクションのうち、コンラッド関係の中核はシンシナティの出版業者 W. T. H. Howe が収集した The Howe Collection であり、当日は、curator の案内で、手書き原稿、タイプ原稿、校正、初版本、書簡や写真などを見ることができた。たとえば、*Victory* のタイプ原稿には緑や黄色での大量の書き込みがあり、定本 Cambridge 版 (2016)でテキスト研究に膨大な頁が割かれている理由が理解できた。この特別室は、映画 *Ghostbusters* のロケで知られる大閲覧室 The Rose Main Reading Room と同じ階にある。

なお、各発表についての詳細な内容は、協会のニューズレター *Joseph Conrad Today: Publication of the Joseph Conrad Society of America*, Fall 2017 に、写真付きで掲載されている。

ニューヨークまで出かけた機会に、学会プログラムとは別に、私個人でイェール大学バイニキ稀観本図書館に足を伸ばした。この“Yale University Beinecke Rare Book and Manuscript Library”というコレクション名は、コン

ラッドの伝記・テキスト研究において必ず言及されており、その所蔵の規模や保存・閲覧の事情に以前から興味があったからである。実際に訪れてみて、このコレクションは間違いなく一見の価値ありなので、「学会報告」の項ながら、追記しておく。

第一線のコンラッド研究者たちのうち、少なくとも伝記・テキスト研究に関わったおそらくすべての研究者がここに足を運んだであろう。前述の **The Berg Collection** と同様、原稿（手稿、タイプ原稿、校正など）や書簡が中心であるが、その規模は格段に大きい。また、散逸しやすい書類（船長資格証書から **Vidar** 号の荷積み票まで）や写真（1860年代のポーランドでの写真一式などを含む）も、ここに原本があったのかと驚きの連続であった。原稿類については、コンラッド自身がある時点から「売（売れる）」ことを前提に用意している様子もわかり、興味深かった。全点マイクロで閲覧可能であるが、実物が整然とファイルされていて、それらを手にとって閲覧することが可能である。“**Heart of Darkness**”の最初の手書き原稿さえも、である。オリジナルは現存1点しかないことを考えれば、事前登録とパスポート提示だけで直に手に取ることができるのは、相当な **liberal access** である。

なぜ、イギリスから離れて、合衆国東部にこれだけ揃っているのか。収集の経緯をたどると、最初は1911年、ニューヨーク在住の裕福なアメリカ人コレクター **John Quinn** がコンラッドから多くの原稿を買い、以後も購入を続けた。その後、イギリスのコレクター **Thomas J. Wise** との紆余曲折があったが、1923年にニューヨークでコンラッド関連の大オークションがあり、まとまった形でニューヨークのコレクター **George T. Keating** の手に入った。この **Keating** が収集物について完璧なカタログを作り、1937年に一括してイェール大学図書館に寄贈し、特別コレクションとなった、となる。つまり、1910年代～20年代のニューヨークという都市の財力が、コンラッド・コレクションをアメリカへ運んだ、と言えるのであろう。

丸々3日間をこの閲覧室で過ごしたが、お宝に囲まれたこの閲覧室は、窓の外にイサム・ノグチの代表作の一つとされる庭園（沈床園）が望まれる、至福の空間であった。

（しだら やすこ 東京女子医科大学 講師）